

埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2

仁科弘之教授退職記念論文集

新出資料・架蔵『十市遠忠百番自歌合』小攷

武井 和人

埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科

新出資料・架蔵『十市遠忠百番自歌合』小攷

武井 和人

【キーワード】

十市遠忠、自歌合、南都、自筆本、識語、鳥居小路経厚、清原宣賢、合点、詠草、石山本願寺、大坂御坊、証如

【要旨】

2016年5月、一古書肆の目録に突如出現した新出資料『十市遠忠百番自歌合』（仮題）の書誌的諸問題を考察したものである。

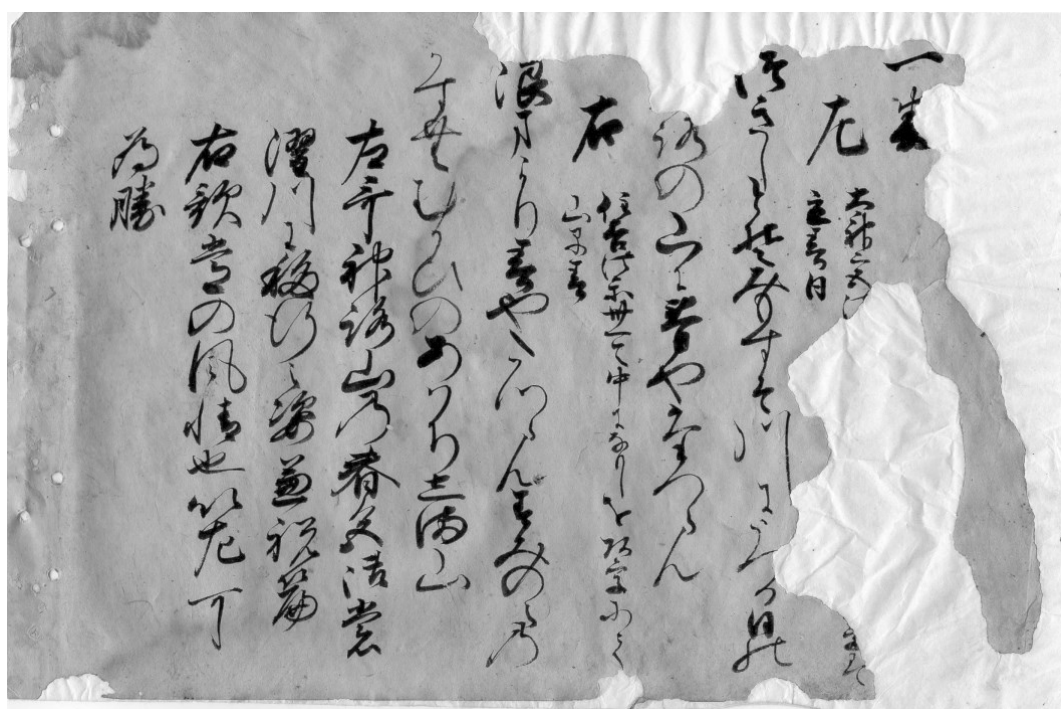
1. はじめに

2016年5月に刊行された『思文閣古書資料目録』第247号（以下『目録』）に、「52遠忠百番自歌合 全一冊」なる典籍が4面分の図版とともに掲出された。『目録』に曰く、「天文八年十市遠忠自詠自筆 和半 箱入 改装 文字欠・破損裏打ちあり」と。

室町後期、大和十市住の豪族にして、狂気ともいひつべき妄執を以て和歌に淫せし希代の畸人、十市遠忠（1497～1545）の文学営為に関する追尋を、ここ15年ほどの己が研究課題として来た小論の筆者にとって、これは、文字通り“事件”であつた。しかも、幸ひこの上なきことに、時日を経ずしてこの典籍を架蔵し得たのである！

はしるはしる親しく手にとりこれを熟覧するに、『目録』の断ずる如く、毫も疑ひなき遠忠自筆（次頁所掲図版参照）。識語（後掲）から、天文8年（1539）正月、遠忠自身が最終的に識語を記し完成させたものであることが知れた。今まで知られ来た遠忠自歌合のいずれとも内容が重ならぬばかりか、恐らくは天壤海内唯一の孤本。かかる典籍が、今の今まで人々に知られることなく伝存しおほせて来たものよ、と驚くとともに、嬉しや、遠忠を偏愛して久しきこの筆者のところに至り至つてくれたものよと、ただただこの僥倖に感謝したものである。

本来晴れがましかるべきこの論集に、かかる「（極私的）偏愛記」を掲ぐるの愚、小論の筆者とて無論自覚してはゐる。なればこそ読者諸氏に乞ふ、こは、希有の古典籍をはからずも入手し得た一研究者の“しれごと”に過ぎず 諒とせられよ、と。

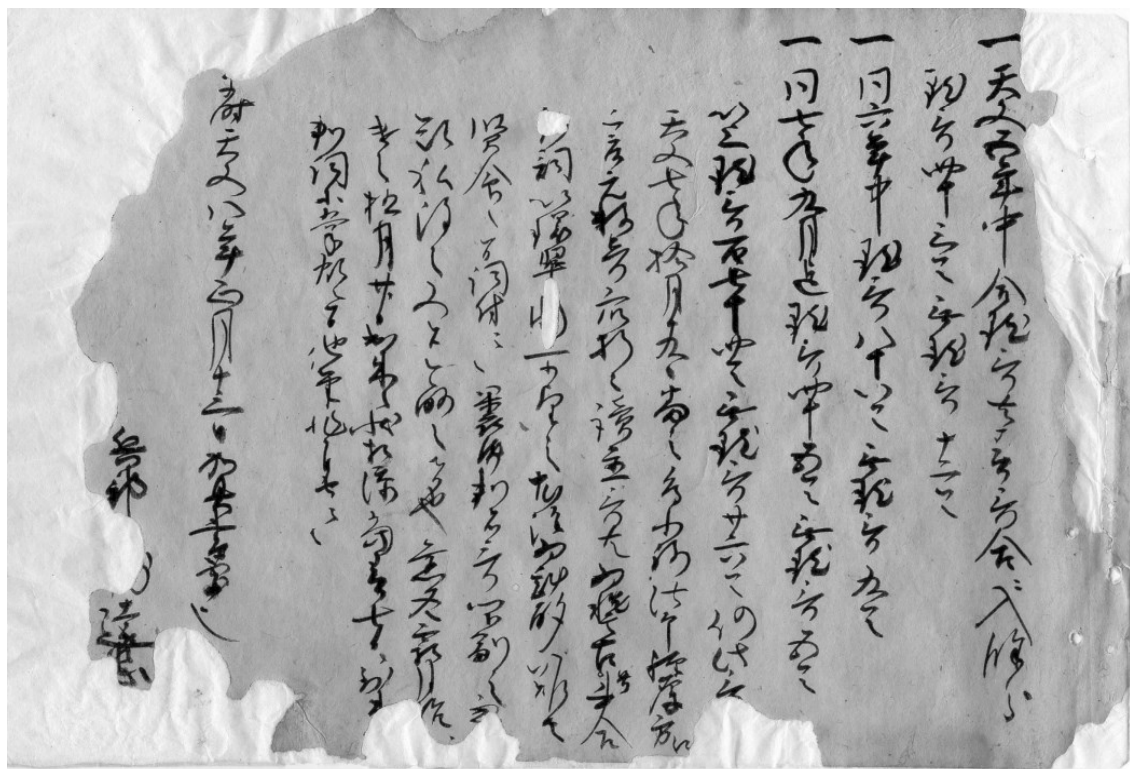


2. 書誌

江戸期桐箱入。蓋中央に「十市遠忠哥書」と墨書。前表紙から見て左半分に大きな物理的破損（理由不明）がある。現在は裏打ち補修の上（裏面は全て白紙）、大和綴になつてゐる。1冊。後補表紙は厚紙（近代のもの）、薄黄土色地菊花繫文様。元前表紙は茶色地の緞子、唐草繫に卍・瓢箪・牡丹等の文様を配す。表紙見返しは、布目空押文様金泥引。本文料紙は厚手の斐楮混漉。縦15.5cm×横24cmの横本。綴穴は3種。2種の四ツ穴、1種の二ツ穴が見て取れる。現装丁の大和綴は、最も書写面寄りの四ツ穴を用ゐる。仮綴→大和綴→大和綴と改装した歟。当初の装丁は、書写面がノドぎりぎりではないので、通常の列帖装とは考へ難い。一応、仮綴（袋綴）であつたらうと考へておく（二ツ穴を繋ぐ形で折れ目が明確に見て取れるので、仮綴の時期が比較的長かつた歟）が、複式列帖装（折紙列帖装）の仮綴であつた可能性もある。紙数は墨付103枚。一面13行書、和歌一首2行書。和歌本文は遠忠筆、判詞は確言は出来ないものの後述する判者自身、即ち、鳥居小路経厚筆かと推される（経厚筆短冊の筆蹟との比較、判詞が書かれるべき行間が各面等間隔であることなどから見て）。故に、詠者・判者自身の手による原本といふことになる。巻末識語より、天文7年から8年初めにかけて書きつけられたものであることが分かる。巻末に経厚の和歌一首（これは経厚筆ではあるまい）、遠忠の返歌一首を付す。

3. 卷末識語から推定出来る成立事情

本自歌合には、卷末に、遠忠自身の手による識語が置かれ、これを読み解くことで、相当程度成立事情が推定出来る。



【架蔵『十市遠忠百番自歌合』卷末識語】

【釈文】

一天文五年中合點哥共春哥合ニ入餘分

點哥四十三首無點哥十二首

一同六年中點哥八十八首無點哥九首

一同七年九月迄點哥四十五首無點哥五首

以上點哥百七十四首無點哥廿六首仍此哥破損

天文七年拾月十九日番之鳥小路法印經厚方江

爰元数奇衆折と讀置哥共為稽古・書合号

判詞以環翠軒所望之尤雖為斟酌難去

賢命之間詞付云裏内判者哥閑副之破損

題私注之又者今略之者也舊冬霜月始

遣之極月廿日出來之状相添當春七日出來

判詞等掌煩之間他筆非自由云

于時天文八年正月十三日加奥書處也

兵部印輔遠忠

この識語から読み取れる事柄を、以下に整理してみる。

①撰歌対象

天文5年詠「春哥合」（未勘）に撰歌しなかつた詠の中から。

〔内訳〕合点歌43首、無点歌12首。（計55首）

天文6年詠全詠歌から。

〔内訳〕合点歌88首、無点歌9首。（計97首）

天文7年詠同年9月までの詠の中から。

〔内訳〕合点歌45首、無点歌5首。（計50首）

②撰歌内訳総計

合点歌174首、無点歌26首。（計200首）

※前項内訳を合計すると、合点歌176首、無点歌26首。計202首となる。合点歌の遠忠のカウントに2首分（年次不明）の誤りが存する。

③結番の時期

天文7年（1538）10月19日、遠忠は結番を完了した。

④加判の依頼と仲介者

「稽古哥合」として、環翠軒（清原宣賢[1475～1550]）を介して、鳥小路経厚（正しくは「鳥居小路」。青蓮院坊官。大蔵卿法印。1476～1544）に、同年霜月（11月）初めの頃、加判を依頼した。

⑤判詞の完成

経厚は、同年極月（12月）20日に完成した旨を記した文書を添へて、翌天文8年正月7日に、遠忠のもとに送り届けた。遠忠は以上の経緯を、同年同月13日、識語として記した。

以上の“読み”は、関連資料とつきあはせることを通して、真偽を確認しておく必要があらう。紙幅の都合もあるので、小論では上記の内、①②、及び④に関して、以下少しく検証を試みてみたい。

4. 撰歌対象とその内訳

遠忠は、大永7年（1527）以降、最晩年の天文12年（1543）に至るまで、その年々の歌稿をもとに、毎年詠草を編んでゐたと思はれる。現存する詠草（及び関連するもの）を成立年代順に掲げてみると、以下のやうになる。

- ①〈大永7年詠草〉新編私家集大成・遠忠Ⅰ（部分）。尊経閣文庫蔵『詠草大永七年中』〔什上・63〕所収。236首。遠忠自筆。

- ② 〈享禄2年詠草〉新編私家集大成・遠忠Ⅰ（部分）。尊経閣文庫蔵『詠草大永七年中』〔什上・63〕所収。434首。遠忠自筆。
- ③ 〈享禄3年詠草〉新編私家集大成・遠忠Ⅰ（部分）。尊経閣文庫蔵『詠草大永七年中』〔什上・63〕所収。12首のみの残闕。遠忠自筆。
- ④ 〈享禄元～4年詠草〉尊経閣文庫蔵『詠草享禄自二至四年』〔什上・60〕遠忠自筆。享禄元年11月の百首歌を巻頭に、享禄2～4年に至る。②〈享禄2年詠草〉と重複するものがある。未刊。
- ⑤ 〈天文元年詠草〉新編私家集大成・遠忠Ⅵ。国立公文書館内閣文庫蔵『賜蘆拾葉』〔217・11〕第86所収「十市遠忠詠草」内「遠忠詠草」。100首。天保7年（1836）新見正路写。
- ⑥ 〈天文2年詠草〉新編私家集大成・遠忠Ⅱ。尊経閣文庫蔵「歌書数種」〔什上・46〕内「遠忠」。遠忠自筆。527首。
- ⑦ 〈天文3年詠草a〉尊経閣文庫蔵『詠草中書』〔什上・65〕遠忠自筆。天文3年正月～3月の草稿的詠草。約400首。未刊。
- ⑧ 〈天文3年詠草b〉尊経閣文庫蔵「歌書数種」〔什上・46〕内「逍遙院御点拔書天文三年中」遠忠自筆。400余首。未刊。
- ⑨ 〈天文3年詠草c〉尊経閣文庫蔵『詠草残欠本十市遠忠筆』〔什上・62〕遠忠自筆。70余首の断簡。未刊。
- ⑩ 〈天文4年詠草〉尊経閣文庫蔵『中原遠忠詠草』〔什上・55〕遠忠自筆。170余首。未刊。
- ⑪ 〈天文3～4年詠草〉新編私家集大成・遠忠Ⅲ。国立国会図書館蔵『十市遠忠詠草』〔WA16・97〕遠忠自筆。⑦～⑩の精撰本か。339首。
- ⑫ 〈天文5年詠草〉新編私家集大成・遠忠Ⅳ。尊経閣文庫蔵「歌書数種」〔什上・46〕内「詠草」。遠忠自筆。492首。
- ⑬ 〈天文6年詠草〉新編私家集大成・遠忠Ⅴ。尊経閣文庫蔵『詠草』〔什上・56〕遠忠自筆。345首。
- ⑭ 〈天文8年詠草〉新編私家集大成・遠忠Ⅶ。天理大学附属天理図書館蔵『遠忠朝臣詠草』〔911・25・イ63〕江戸中期写。496首。
- ⑮ 〈天文9・12年詠草〉尊経閣文庫蔵『三百六十首和歌』〔什上・57〕拙著『中世古典籍之研究』（新典社、2015・9）所掲。

「天文5年詠」に対応するものを求めると、⑫〈天文5年詠草〉（以下、新編私家集大成の略号「遠忠Ⅳ」を以て代替）それと目されよう。

遠忠Ⅳは、巻頭に「天文五年元日の三首」と題する歌群が配され、「（十二月）十七日 立春」題の三首を以て終はる。即ち、天文5年の歌稿全体を撰歌対象として編まれた詠草と推定することが出来る。従つ

て、**遠忠Ⅳ**が本自歌合の天文5年詠分の直接的な撰歌資料になつたとは確言出来ないものの（歌稿から直接本自歌合は撰歌したとも考へられるから）、ひとまづは、この**遠忠Ⅳ**に見える歌歌が本自歌合にどの程度（遠忠の言を信ずれば、55首内外）存するか、また**遠忠Ⅳ**に見える歌歌に合点がどのやうにかけられてゐるか、などを確認することを通して、先の内訳の数字の信憑性のある程度は確認することが出来ると思ふのである。

「天文6年詠」に目を転じると、これは、⑬〈天文6年詠草〉（以下、新編私家集大成における略号である**遠忠Ⅴ**）がそれと知れる。

遠忠Ⅴは、巻頭「年始嘉例之三首」（「年」の右傍に「天文六」とあり）と題する歌群が配され、巻尾には、「三輪社法楽五十首 毎年詠十二月九日始之」で始まる続歌が置かれ、18日までの記載を認めることが出来る。従つて、これも、**遠忠Ⅳ**と同様に、天文6年の歌稿全体を撰歌対象として編まれた詠草と考へられ、本自歌合の撰歌対象調査の資料となる。

問題は「天文7年詠」である。上掲の如く、現時点で天文7年詠を収めると認められる詠草は存しない。そこで小論では、本自歌合において、**遠忠Ⅳ**及び**遠忠Ⅴ**に見えない歌歌を、“仮に”天文7年詠と認定してみようと思ふ。その結果、遠忠が示した内訳数に近いものが得られれば、この仮説は概ね証明されたと判断することが出来ようかと思ふからである。

以上の見通しのもと、本自歌合と**遠忠Ⅳ**及び**遠忠Ⅴ**とに重出する歌を掲出する。なほ、漢数字は、本自歌合にわたくしに付した通番号（一～二〇〇）である。

●天文5年（**遠忠Ⅳ**）・有点歌《39首》

四、五、八、九、一二、一五、一六、二四、二六、二八、三九、四〇、四一、四九、五〇、五一、五六、五八、五九、六一、六八、七一、七二、七三、七四、七六、八七、一〇四、一〇七、一一四、一一六、一二〇、一二七、一二八、一四五、一七四、一七八、一九二、一九四

●天文5年（**遠忠Ⅳ**）・無点歌《12首》

一八、七六、一二二、一三三、一三四、一三六、一三七、一五〇、一七二、一七七、一八〇、一八六

●天文6年（**遠忠Ⅴ**）・有点歌《60首》 ※（ ）、歌頭「〇」のみを冠す
二、三、一四、一七、二三、二九、三〇、三一、三二、三四、三七、四二、四三、四六、四七、五二、五四、（六二）、六三、六六、六七、六九、**七〇**（**遠忠Ⅴ**・304、補入）、七七、七八、八八、九二、九八、一〇一、一〇二、一〇三、一〇九、一一〇、（一一二）、一一五、一

二一、一二三、一二四、一二六、一三〇、一三一、一三五、一三八、
 (一三九)、一四〇、一四九、一五一、一五三、一五五、一五六、
 一五七、一五九、一六四、一六八、一七一、一七三、(一七五)、一
 八二、一九一、一九六

- 天文6年(遠忠V)・無点歌《34首(遠忠V・289~345ノ内=23首)》
 七(遠忠V・291)、一〇(遠忠V・290)、一四、二七(遠忠V・292)、
 三八、五五(遠忠V・299)、六〇(遠忠V・300)、六五(遠忠V・
 302)、七五(遠忠V・337)、九五(遠忠V・310)、九六(遠忠V・
 313)、九七(遠忠V・311)、一〇八(遠忠V・314)、一一一、一一
 七(遠忠V・316)、一一九、一二五(遠忠V・317)、一二九(遠忠
 V・319)、一四六、一四七、一四八(遠忠V・329)、一五二(遠忠
 V・332)、一五四(遠忠V・331)、一六一(遠忠V・333)、一六三
 (遠忠V・336)、一六五、一六七、一七〇(遠忠V・337)、一八一
 (遠忠V・340)、一八五(遠忠V・335)、一八七、一九〇(遠忠V・
 341)、一九三、二〇〇

- 天文7年(=遠忠IV・遠忠Vニ未見ノ歌) 《55首》
 一、六、一一、一三、一九、二〇、二一、二二、二五、三三、三五、
 三六、四四、四五、四八、五三、五七、六四、七九、八〇、八二、
 八三、八四、八五、八六、八九、九〇、九一、九三、九四、九九、
 一〇〇、一〇五、一〇六、一一三、一一八、一三二、一四一、一四
 二、一四三、一四四、一五八、一六〇、一六二、一六六、一六九、
 一七六、一七九、一八三、一八四、一八八、一八九、一九五、一九
 七、一九八、一九九

さてこの数字と、遠忠自身の言による内訳数とを比較してみよう。

	遠忠識語ニ見エル内訳	遠忠IV・遠忠Vトノ重出
天文5年詠	有点…43 無点…12	有点…39 無点…12(遠忠IV)
天文6年詠	有点…88 無点… 9	有点…60 無点…34(遠忠V)
天文7年詠	有点…45 無点… 5	【55(遠忠IV・Vニ未見)】

ここで求められることは、この数字を“どう判断するか”である。

「天文5年詠」(遠忠IV)を見ると、まづ、無点歌12首といふ数の一
 致が目をつく。偶然とは考へがたい。また、有点歌も(歌稿を詠草と
 して書写した際の)誤カウントを考慮に入れば、深刻な不一致とは
 認め難く、従つて、現存する遠忠IVから直接本自歌合は採歌された、
 と判断して良いだらう(歌稿から、といふ考へ方も無論成り立ちうる
 が、検証が出来ないので、ひとまづ考慮から外す)。

「天文7年詠」(本自歌合に見えてゐて、遠忠IV・Vに見えない歌歌)

に関しては、天文7年詠の歌稿から直接採歌されたものと考えたい。天文7年詠から成る家集もいずれは作られたであらうが、本自歌合成立時（天文7年10月）に成書してゐたとは考へにくく、歌稿から直接撰歌されたと考へる方が自然である。

残された問題は「天文6年詠」である。総計においては略同一であるにもかかはらず、有・無点歌の数が余りに違ひ過ぎる。総計の略一致といふ点から見て、別の撰歌対象であつたとは考へにくい。

そこで思ひ至つたのが、上掲の調査結果において、漢数字に網をかけておいた歌歌である。これは、**遠忠Ⅴ・289～345**（上文にて**遠忠Ⅴ**の巻尾に配されるとした歌群）、天文6年12月9日「三輪社法楽五十首」の内の歌歌である。尊経閣文庫本を見るに、補入される1首（七〇[**遠忠Ⅴ・304**])を除き、すべて無点歌である（定数歌にあつて、合点歌が1首だけといふのは、**遠忠**詠草にあつては不自然である）。仮にこの「三輪社法楽五十首」から採られた無点の歌歌（計23首）を減じてみると、無点歌数は11首となり、**遠忠**がいふところの9首に相当程度近づく。

これらのことから、以下のやうな推定が成り立つと考へる。

遠忠は、「天文6年詠」に関しても、基本的には**遠忠Ⅳ**と同じく、既に成書されてゐたであらう**遠忠Ⅴ**を、直接の撰歌対象とした。ただし、**遠忠Ⅴ**の末尾に配された「三輪社法楽五十首」に関しては、その後何人かの手による合点がかけられた。ところが結果として、それは歌稿にしてのみなされ、詠草である**遠忠Ⅴ**にその合点はずひに反映されなかつた（評語は**遠忠Ⅴ**に転記されてゐるにもかかはらず）。その後、**遠忠**は**遠忠Ⅴ**の「三輪社法楽五十首」に1首の誤脱があることに気付き、成書されてゐた**遠忠Ⅴ**に、歌稿においてなされた如く、合点をかけた形で補入した。**遠忠**は、本自歌合を撰歌する折、「三輪社法楽五十首」のみ例外的に、合点のかけられた（＝**遠忠**にとって理想とする形に整へられた）歌稿から撰歌した。このやうな経緯があり、**遠忠**の言による内訳と、**遠忠Ⅴ**の現状との間に齟齬が生じてしまった。

5. 加判依頼の仲介者と判者

遠忠の識語によれば、**遠忠**は、清原宣賢を介して、鳥居小路経厚に加判を依頼した、といふことになる。この三者の組み合わせのしかるべしさをまづは確認しておく必要があらう。

清原宣賢は、室町後期を代表する漢学者であるが、その一方で、『詞源略注』『詞源要略』『新古今注』『歌注抄』といった、歌学書も著して

みて、和歌にも造詣が深かった。

ここで以下の遠忠詠草に見える次の記載に注目したい。

環翠軒登城之時、一統中に（遠忠Ⅲ・115、詞書）

天文4年、恐らく晩春の頃、宣賢は遠忠の居城に赴き、続歌を詠んでゐる。天文期における両者の好誼をここから推測することは許されよう。

遠忠が宣賢を介して、特に三条西実隆に詠草の添削・加点、自歌合の加判を求めてゐたことを、『実隆公記』の記事や、さまざまな古典籍等の紙背文書等より明らかにした先行研究が存する。即ち、

末柄豊「畠山義総と三条西実隆・公条父子一紙背文書から探る一」
（『加能史料研究』22、2010・3）

同「尊経閣文庫所蔵『春除目抄』紙背文書解説」

（前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成50春除目抄京官除目次第他』〔八木書店、2016・5〕所収）

末柄によれば、『実隆公記』には、宣賢が実隆と遠忠の間をとりもつたことを示す記事が、享禄5年正月17日、2月11日、3月22日、天文2年4月15日、7月25日、天文3年正月4日、4月17日条などに見える。本自歌合よりはやや早い時期の記事だが、それは、実隆が天文6年10月3日に没し、それ故、『実隆公記』も天文5年2月までの記事しか残されてゐないことを鑑みれば、なんら訝しむにあたらない。むしろ、本自歌合の奥書から、実隆没後も、遠忠が宣賢を介して京都の貴顕に歌道指南を受けようとしてゐたことに注意すべきである。

一方の鳥居小路経厚は、堯恵より『古今集』の説を相伝し、青蓮院尊鎮親王や青蓮院坊官大谷泰昭に伝授した（『曼殊院古今伝授資料7』）他、『百人一首聞書』『名所百首和歌聞書』『愚問賢注聞書』等、和歌に関する注釈も多数存し、当代を代表する歌学者であつた（酒井茂幸『愚問賢注古注釈集成』〔新典社、2015・10〕参看）。

遠忠と経厚の和歌を介した紐帯は、本自歌合成立より早く、鳥居小路経文蔵『（鳥居小路家）家傳』（濱口博章『中世和歌の研究^{資料と証}』〔新典社、1990・2〕所収）に「天文二年六月十二日、大和國十市當城新宮住吉三十首和歌、十市遠忠勸進之、為其人数、詠二首巻題」（第1冊17丁裏）と見える記事によつて知られるところである。この「當城新宮三十首勸進和歌」は、天文2年詠を収める遠忠Ⅱに、「当城新宮住吉法樂卅首

続歌内」(220番歌・詞書)と見える続歌に対応すると思はれ、『家傳』の資料性を疑ふ必要はない。また、『家傳』によれば、天文13年8月5日、経厚の死にあたり企図された「四十八願和歌」に、遠忠が二首詠進してゐる(第1冊18丁表)など、天文期における遠忠と経厚の和歌を介した紐帯に関する徴証は確実に存し、遠忠が経厚に判を乞うたとしても、不自然ではない。

また、濱口前掲書が早く指摘する如く、『石山本願寺日記(証如上人天文日記、天文日記などとも)』天文5年正月6日条以降、経厚の名がしばしば見える(多くは「鳥居^(ママ)少路」と記載されるが、例へば「鳥居少路経厚法印」といつた記載もある[天文6年正月5日条他](引用は大系真宗史料による、以下同)ので、経厚その人を指すと断じうる)こと、また、同記天文7年8月3日条に「鳥居少路今朝上洛候、輿にて送候」、また同8年正月2日条に「鳥居少路法印喚之、以一献令対面候」などと見えること、同記によれば、屢々証如と禁裏・門跡・公家等の間を取り持つてゐること、順興寺実従(蓮如末子)『私心記』天文13年4月26日条に「朝四時鳥居小路死去候也、行テ見候」(大系真宗史料所収東大本による)とあり(『家傳』同日条にも摂州にて死去の記事あり)、石山本願寺近辺で没したこと、などの記事から併せ考へるに、この頃、経厚は京を出で、『天文日記』の著者である本願寺第10世証如の居であつた石山本願寺(大坂御坊)からさほど遠からざる所(あるいはごく近隣か[「鳥居少路被住候座敷へ、裏の馬屋などあるき候」(天文6年正月15日条)])に住してゐたと断じうる。

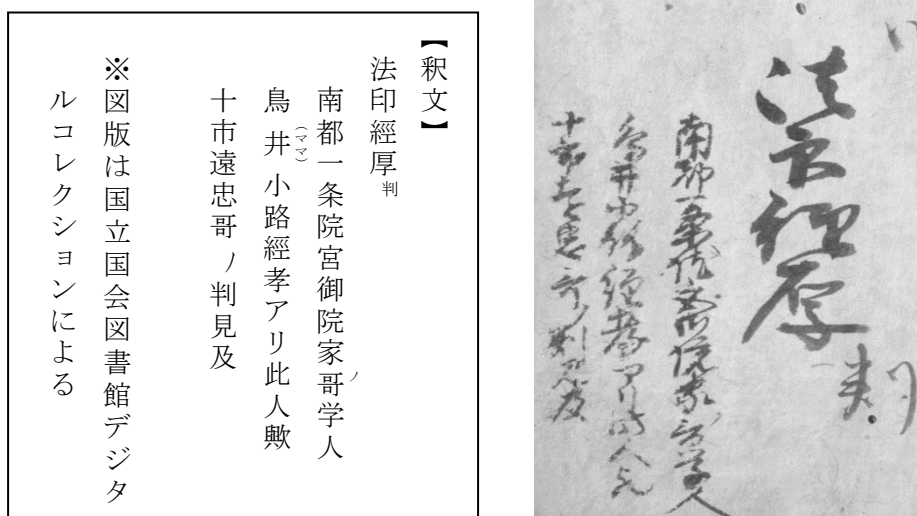
更に遠忠も証如と政治的に何らかの交誼があつたらしく、『天文日記』に「従大和国十市方、今度就細川与和融之儀、為音信一腰馬^馬書状来候。使在之」(天文5年8月14日条)、「十市兵部少輔方先日之返礼遣候。使芝田也」(同年9月10日条)といった記事が見える。想像を逞しうすれば、証如を介して、経厚の所在・動静等を細かに把握してゐ、なればこそ、経厚への加判依頼が可能であつたのだらう。

加ふるに、経厚への判詞依頼仲介者である宣賢も、証如と密接な関係にあつた。即ち、証如に対し「従環翠軒申事ニハ、就御料所儀、能登へ下候。(略)自其、能登へハ行候はん程ニ路次無聊爾之様、加州へ可申付之由候」(『天文日記』天文7年3月6日条)と、加賀へのメッセンジャー役を申し出てゐたりする。

かかる記事から推すに、証如を核として、遠忠・経厚・宣賢が結びついてをり、本自歌合の成立契機圏を大坂に求めることも可能である。

いま一つ、紹介しておきたい文献上の徴証が存する。それは、国立

国会図書館蔵『百人一首抄（経厚抄）』〔WA16・130〕の巻尾に本文とは別筆で書き込まれてゐる注記である。



恐らくこの注記に初めて言及したのは、国立国会図書館参考書誌部編『国立国会図書館蔵貴重書解題第九巻 古写本の部 第二』（1978・8）であらうと思ふが、「この記事は、筆跡が本文と異なるから、後に誰れかによって書き加えられたものであろうが、あまり信ぴょう性はない」（64頁下段）と、当該識語の資料性が否定されてゐる。確かに経厚を「南都一条院宮御院家（ママ）」云々と判断するのはいかにも危ふいが、「（経厚ニ関シテ）十市遠忠哥ノ判見及」といふ証言は注意される。即ちこの注記を施した某は、「経厚」判の遠忠がかかはる歌合を「見及」んでゐるのである。これがただちに本自歌合であるとまではいへまいが、本自歌合の流传を物語るかもしれない唯一の外部徴証として、ここに紹介しておくこととしたい。

6. 経厚の加判

本自歌合のこの判詞は、経厚にとって、知られる限り唯一のものである。従つて、歌人・経厚研究にとつても、本自歌合は極めて貴重な資料といふことが出来る。そこで、経厚の加判の傾向の一つを見てみたい。

五十二番

左 暁鴈

はたさむミ暁かけてゆくかりや

つはさしほるゝ露になくらん（遠忠 V・49）

右 古渡秋霧

いかにせむさのゝわたりの夕霧に
家ありとても立やまよハむ（遠忠Ⅴ・110）
左才一句も猶思ふへくや才五
句も聊不相應や侍らん
右才四句も詞をいたはる方も
なくいへるいかゝと覚え侍れは
まさるとも申かたくや

まづ左歌。経厚は、第一句「はたさむミ（肌が寒いので）」の表現の未成熟さを指摘する。確かに「はださむみ秋なるかぜのこよひかな月も身にしむいろにながめて」（『伏見院御集』422）といった先行例はあるものの、直截的な表現故、表現として成り立たせるのは至難。実際用例は甚だ僅少（他には邦高親王詠が存する程度）。また、第五句「露になくらん」を「不相應」とする。小論では「不相應」の含意を、「露に」雁が「鳴く」といふ結構の呼応関係がよく分らない、といふ意味と解しておきたい。

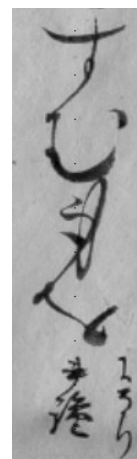
次に右歌。本歌が「こまとめて袖うちはらふかげもなしさののわたりの雪の夕暮」（『新古今集』冬・671、定家）であることは余りにもあからさま。経厚が難とする第四句「家ありとても」は、本歌への挨拶が過ぎよう。そこには、表現に対するデリカシーが決定的に闕ける（「『詞をいたはる方』が『な』い」といふ言辞は、かう解釈してみたい）。

かく、経厚判は、遠忠歌の拙劣さに対して情け容赦がない。己が歌学者としての純な、かつ、厳しい目で歌歌を見、判断したと覚しい。

7. 遠忠の対応

遠忠が真摯に経厚の加判に対峙したであらう痕跡も認めうる。

九十八番
左 春日法樂三十首中に
めくミをハ猶さしそへよ名にしおふ
みかきの山のかけにすむ身をになり書謬。（他出未見）
右
身のねかひことしかなひて神わさを
いそくこゝろの春にあふかな（遠忠Ⅴ・3）
左結句のをもしいかゝと見ゆ
右猶神に忠あるやうなれは
勝とや申侍らん



経厚は、第五句「かけにすむ身を」の「を」を訝しいとした。これも道理で、「恵み」を「添へよ」といつてゐるのだから、第五句は「～に」でなければならない。遠忠もこの誤りは素直に認めて、第五句末尾に「になり／書謬」と書き加へた（図版参照）。即ち、「身を」が誤記（「書謬」）であつて、経厚の指摘の通り「身に」とすべきであつた、といふのだ。

本自歌合は、まづ以て、遠忠・経厚以外の第三者の目に触れることを前提には作られてゐまい。従つて、遠忠のかかる追記は、ひとり遠忠かれ自身にのみ向けられたものといはざるをえない。遠忠の表現に立ち向かはんとする至純なる姿勢をここから読み取ることは十二分に可能である。

遠忠といふ男、歌人としての達成は、残念ながら“旦那藝”の域にとどまつた。そのことを承知の上であへていふのだが、遠忠の和歌そのものに己が全存在をかけて奉仕せんとするかの如き熱情、真情は、なによりも小論の筆者の胸をうつ。遠忠を“偏愛”する所以のものである。

8. をはりに

今後機会を得て、本自歌合全体を景印し釈文も公にしたいと思ふ。

なほ、小論は、JSPS科研費26370200の助成を受けたものである。

（埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授）